

陶弘景年譜考略(下)

麥谷邦夫

齊和帝中興元年 辛巳 五〇一 四十六歲

三月乙巳、和帝、江陵に於て即位する。通鑑齊紀十

九月、蕭衍、新林に至る。梁書武帝紀上

蕭衍に上表し、その前途を慶賀する。

『南史』にいう、「齊末爲歌曰、水丑木爲梁字、及

梁武昌至新林、遣弟子戴猛之假道奉表」。また『陶

君碑』には、「我大梁休運應期、受天明命、三辰開

朗、四海寧誼、先生奉表稱慶、於是信問復通」とい

う。永元元年以來、外界との交渉を一切断っていた

弘景は、蕭衍の軍が新林にまで進出してくると、も

はや大勢定まったと判断して、自ら積極的に蕭衍と

の交渉を求めていった。この間、沈約には「華陽先

生登樓不下贈呈」と題する詩があったことが知られ、外界との交渉を一切断ったといっても、沈約などとの關係は断たれず、それを通じて外界の事情には充分注意を拂っていたと思われる。弘景は蕭衍には早くからの知合いであったが、この時期に弘景の方から積極的に接觸を求めたことは、双方にとって、極めて政治的な意味をもった。齊の明帝時から隱士としての高い名聲を有していた弘景が、二年間にわたる音信杜絶を破って慶賀を表してきたことは、新政權にとってその權威を大いに高めるといふ効果を有したのである。一方弘景にとっては、以後の一連の禪讓劇に参加する機會を得て、自己の名聲の昂揚

と教團勢力の擴張とを保障されたのである。

孔稚珪卒。年五十五、宋元嘉二十生。蕭穎胄卒。年四十、宋四年(四四七)生。大明六年(四六二)生。

梁武帝天監元年 壬午 五〇二 四十七歲

正月戊戌、蕭衍、梁公に封ぜられる。武帝紀上

四月丙寅、蕭衍、齊の讓りを受けて、梁朝を建てる。

圖讖を援引し、梁の國號を獻ずる。武帝紀中

『梁書』にいう、「義師平建康、聞議禪代、弘景援引圖讖、數處皆成梁字、令弟子進之」。また『眞系』に、「及梁武帝革命、議國號、未定、先生乃引諸讖記、梁是應運之符、又擇郊禪日、靈驗昭著、勅使入山、宣旨酬謝」といふ。かく新王朝受命の正統性を、圖讖を縱横に引いて「合理的」に立證してみせに弘景は、沈約に對して、齊梁革命の陰の立役者とされる。これ以後、武帝の彼に對する信頼は絶大で、國家に吉凶征討の大事有るときには、必ず事前

陶弘景年譜考略(下)

に諮問があり、常に月に數回勅使の入山があつたが、當時の人々が彼を「山中宰相」と呼んだことが『南史』に見える。かくて、弘景は天監年間を通じて、政治の裏面で大きな役割を果していった。

桓闓、この頃『太平經』を入手する。道學傳

伏曼容卒。年八十二、宋永初二年(四二二)生。

天監二年 癸未 五〇三 四十八歲

正月、沈約、尙書左僕射、范雲、尙書右僕射となる。

大小道正を置き、孟景翼を大道正とする。太平御覽卷六六六引道

蕭綱生。梁大寶二年(四五)卒。年四十九。

沈麟之卒。年八十五、東晉元熙元年(四一九)生。何佟之卒。年五十五、宋元嘉二十六年(四五二)生。

范雲卒。年五十三、宋元嘉二十八年(四五二)生。

天監三年 甲申 五〇四 四十九歲

四月、捨道奉佛の詔を下す。集古今佛道論衡

この詔については偽作説もあるが、いずれにせよ、これによって弘景と武帝との關係には何らの變化も起らなかった。

何點卒。年六十八、宋元嘉十四年(四三七)生。

天監四年 乙酉 五〇五 五十歲

正月、五經博士を置き、賀瑒、明山賓、沈峻、嚴植之を補す。通鑑梁紀二

居を中茅山積金東澗に移し、煉丹を始める。

先に捨道奉佛の詔を出したという武帝は、若い時は熱心な道教信者であり、帝位についてはからは、漢武と同じように不老長生の丹藥に執着し、弘景にその作成を命じた。『南史』には、「弘景既得神符祕訣、以爲神丹可成、而苦無藥物、帝給黃金朱砂曾青雄黃等、後合飛丹、色如霜雪、服之體輕、及帝服飛丹有驗、益重敬之」とあり、弘景の方から煉丹をもちかけたようにとれるが、『梁書』は單に、「天監四年、移居積金東澗、善辟穀導引之法、年逾八十而有壯

容」というのみで、煉丹には觸れない。弘景の道教が、専ら神仙との靈的交流に重點を置き、その道術も草木藥を主體とする服藥を中心とするものであったことを考えると、弘景が煉丹に積極的であったかどうかは甚だ疑問である。

江淹卒。年六十二、宋元嘉二十一年(四四四)生。

天監五年 丙戌 五〇六 五十一歲

「難均聖論」文集、廣弘明集卷五

この論は、沈約の「均聖論」への反論であり、沈約はこの難論にも答えている。論點は、沈約が『莊子』注の中で郭象が展開した跡、所以跡の理論を援用して、中國の聖人も印度の釋迦もともに佛法を體現しているのであつて、その間には何らの差異は無いと主張するのに對して、歴史的地理的限定を根據にして反論したものであり、儒佛論争風の議論が展開されている。『廣弘明集』には「華陽先生難鎮軍均聖論」とあり、『梁書』卷十三沈約傳では、彼が

鎮軍將軍であつた期間を天監三年から五年にかけてであるとする。

魏收生。北齊武平三年(五七二)卒、年六十七。

謝朓卒。年六十六、宋元嘉十八年(四四一)生。到沆卒。年三十、宋昇明元年(四七七)生。

天監六年 丁亥 五〇七 五十二歲

徐陵生。陳至德元年(五八三)卒、年七十七。

夏侯詳卒。年七十四、宋元嘉十一年(四三四)生。

天監七年戊子 五〇八 五十三歲

王整と改名し、永嘉青嶂山に往く。

『内傳』によれば、今度の改名、旅行は煉丹の適所を捜す爲のものであるというが、不可解な部分が多い。

弘景の煉丹については、『梁書』は何もふれ

ず、『南史』が、「弘景既得神符祕訣、以爲神丹可

成、而苦無藥物、帝給黃金朱砂曾青雄黃等、後合飛

丹、色如霜雪、服之體輕、及帝服飛丹有驗、益重敬

之」と傳えるが、弘景の道術が草木藥を中心とする

陶弘景年譜考略(下)

藥物と誦經などを中心とするものであることからみて、假に煉丹の事實は有るとしても、『南史』などが傳えるような、自ら積極的に望んだものとは思われない。逆に、武帝から強く要請されて否應なしに行つた可能性が大きい。この年から天監十一年までの長期の旅行、改名した上でひっそり建康を出たこと、武帝から歸還を促す詔が下つてから一年あまりもかかつて建康にもどつてゐることなどは、この旅行が武帝の煉丹要求を避ける爲のものであつたという推定を可能ならしめよう。なお、沈約に「奉華陽

王外兵」なる詩がある。

曹景宗卒。年五十二、齊大明元年(四五七)生。

丘遲卒。年四十五、宋大明八年(四六四)生。

任昉卒。年四十九、宋大明四年(四六〇)生。

天監八年 己丑 五〇九 五十四歲

天監九年 庚寅 五一〇 五十五歲

初めて祖冲之の大明曆を用いる。

通鑑梁紀三

五九

崔鴻『十六國春秋』なる。魏書本傳

王遠知生。唐貞觀九年(六三五)卒。年百二十六。

賀場卒。年五十九。宋元嘉二十九年(四五二)生。蕭穎達卒。年三十四。宋昇明元年(四七七)生。不詳。

王亮卒。生年不詳。

天監十年 辛卯 五一一 五十六歲

霍山にゆく。

陶季直卒。年七十五。宋元嘉十四年(四三七)生。呂僧珍卒。年五十八。齊孝建元年(四四九)生。

五四

天監十一年 壬辰 五二二 五十七歲

武帝、弘景召還の使者を出す。陶君碑

天監十二年 癸巳 五三三 五十八歲

鄞縣の阿育王塔に詣で受戒する。

『梁書』に、「曾夢佛授其菩提記、名爲勝力菩薩、

乃詣鄞縣阿育王塔自誓、受五大戒」というのは、本年、永嘉地方から建康に歸る途中のことであろう

か。鄞縣は、今の浙江省鎮海縣の西。『嘉慶重修一統志』寧波府の條に、「阿育王寺、在鄞縣東阿育王山中、晉義熙初建、一名廣利寺、梁武賜今名、寺有阿育王所送眞身舍利塔」。また、「阿育王山、在鄞縣東四十里、……明統志、舊名鄞縣、晉太興中、并州人劉薩訶得阿育王塔於此、因名」という。

弘景と佛教との出合いは、その母智湛が熱心な佛教信者であったことを發端とする。その後、永明年間の士大夫の佛教への傾倒の風氣の中で、彼は主として佛教醫學の吸收を目的として多量の佛經を讀んだと思われるが、それは知識欲の對象であり、佛教信仰の結果ではない。その後、梁武帝の熱心な佛教信仰、沈約及び彼を通しての草堂寺慧約との交際の影響を受けた結果がこの度の受戒であった。しかし、當時最も熱心な佛教徒の一人であった沈約が、この年、齊の和帝に禪讓の責任を問われる夢を見るや、道士を呼んで赤章を天に奏して懺悔したというエピソードが示す精神構造が、六朝士大夫に一般的であ

つたように、弘景の佛教信仰も、その道教信仰と何ら矛盾するものではなかった。このことは、早くは

『眞誥』 鈔録の中で、上清經、法華經、莊子内篇を

あげて、「此三道足以包括萬象、體具幽明」と述べている所や『眞誥』注の中にも見出されるが、この

頃書かれたと思われる「答朝士訪仙佛兩法體相書」

文集、藝文類 聚卷七十八 の中で、「凡質像所結、不過形神、形

神合時、則是人是物、形神若離、則是靈是鬼、其非離非合、佛法所攝、亦離亦合、仙道所依、……

假令爲仙者、以藥煉其形、以精靈鑿其神、以和氣濯其質、以善德解其纏、衆法共通、無碍無滯、欲合則

乘雲駕龍、欲離則尸解化質、不離不合、則或存或亡、于是各隨所業、修道進學、漸階無窮、教功令

滿、亦畢竟寂滅矣」というのも、かなり高度な道佛習合が行われていたことを示すものと言えよう。彼

は翌年茅山に歸ると、武帝から勅賜された朱陽館の東西に青壇、素塔を建てて佛道二教兼修の意を表わ

し、「大造佛像、爰及寫經、起塔招僧、備諸供養、

陶弘景年譜考略(下)

自誓道場、受菩薩法、夢登七地」と『陶君碑』が記すような生活を始めている。

庚信生。隋開皇元年(五八〇)卒、年六十九。

沈約卒。年七十三、宋元嘉十八年(四四一)生。謝覽卒。年三十七、齊昇明元年(四七七)生。

天監十三年 甲午 五一四 五十八歲

正月、茅山にもどり、東澗に住す。

武帝、朱陽館を勅修する。

朱陽館は、茅山に於る許穆の舊居を勅修したものである。

鄭灼生。陳太建十三年(五八〇)卒、年六十八。

天監十四年 乙未 五一五 六十歲

朱陽館完成し、ここに移る。

「請雨詞」文集

王茂卒。年六十、齊孝建三年(四五六)生。周子良卒。年二十、齊建武三年(四九六)生。

天監十五年 丙申 五一六 六十一歲

新たに鬱岡に齋室を建てて移る。

「進周氏冥通記啓」文集

『周氏冥通記』は、弘景の弟子周子良が、天監十四年五月から同年十月に自殺するまでの間に、神仙と交霊した記録を、弘景が整理附注したものである。

梁、華林遍略の編纂に著手する。南史何思澄傳

王瑩卒。不詳生年

天監十六年 丁酉 五一七 六十二歳

武帝、文錦に仙人鳥獸紋を用いることを禁じ、初めて

宗廟に麝香を用いる。通鑑梁紀四

柳惲卒。年五十三、未泰始元年(四六五)生。

天監十七年 戊戌 五一八 六十三歳

「許長史舊館壇碑」文集、藝文類聚卷七十八

序にいう、「晉太和元年、句容許長史在斯營宅、厥

迹猶存、宋初、長沙王就其地之東、起道士精舍、梁

天監十三年、勅買此精舍、立爲朱陽館、將遠符先

徵、定詳火曆、於館西更築隱居住址、十四年、別創

鬱岡齋室、追玄洲之蹤、十七年、乃繕勒碑壇、仰述

眞軌。朱陽館完成後、許穆、許翹の傳を刻んで建て

たものである。なお、實際に碑が完成したのは普通

三年(五二二)である。清・翁大年『舊館壇碑攷』

によれば、この碑の冒頭の「上清真人許長史舊館壇

碑弟子華陽隱居陶弘景謹造」なる二十四字が弘景の

眞筆であり、碑自體は明の嘉靖初年に火にかかって

毀れるまで茅山に存したという。また、その拓本も

流傳していたというが、現存するかは不明である。

沈不害生。陳太建十二年(五八〇)卒、年六十三。

天監十八年 己亥 五一九 六十四歳

「上梁武帝論書啓」文集、法書要錄?

「論書啓」は全部で五首残っており、これに對する

武帝の答詔四首も現存する。

弘景の父祖がともに書に堪能であり、彼自身も幼時

からその方面に才能をあらわしていたことは『本起

録』に見えるが、成長してからの弘景は、より一層書に對する情熱を燃している。楊許の眞跡搜集のう

骨體甚駿快」と評しており、素朴ながらも骨のある書風であったことが想像される。

らには、書藝術的興味が與つていたことは前述したが、「論書啓」第二首の中では、「昔患無書可看、

慧皎『高僧傳』

顧野王生。陳大建十三年（五八）卒、年六十三。江總生。隋開皇十四年（五九四）卒、年七十。

乃願作主書史、晚愛隸法、又羨典掌之人」と述懐している。こうした彼の書の趣味が、文人皇帝武帝の

劉歆卒。年三十二、齊永明六年（四八八）生。

それと一致した所に生れたのが、この一連の「論書啓」と答詔であり、彼らの交友がより多彩なもので

梁武帝普通元年 庚子 五二〇 六十五歲

蕭綱に招かれて京口にゆき、數日談論して歸る。

あったことを示している。これらは、いずれも天監

年間に交されたと思われるが、その中では、新たに

『梁書』に、「後太宗臨南徐州、欽其風素、召至後堂、與談論數日而去」とある。『梁書』卷四簡文帝紀によれば、蕭綱が南徐州刺史であったのは、本年

れる。

弘景は書家としても一家を成しており、庾肩吾の

韋叡卒。年七十九、宋元嘉十一年（四四二）生。憑道根卒。年五十八、宋大明七年（四六六）生。

『書品論』中之下の條に、王導、郗超、謝朓らとともに列ねられている。しかし、彼の手跡は全く現存

普通二年 辛丑 五二一 六十六歲

せず、その詳細は不明である。ただ、袁昂の『古今書評』が、「陶隱居書如吳興小兒、形容雖未成長而

陶弘景年譜考略（下）

劉峻（孝標）卒。年六十、宋大明六年（四六二）生。

普通三年 壬寅 五二二 六十七歲

庾仲容卒。年七十四、宋元嘉二十六年(四四九)生。
王僧孺卒。年五十八、宋泰始元年(四七三)生。

普通四年 癸卯 五二三 六十八歲

「吳太極左宮葛仙公之碑」文集

阮孝緒『七錄』

王暕卒。年四十七、宋昇明元年(四七七)生。

普通五年 甲辰 五二四 六十九歲

王份卒。年七十九、宋元嘉二十三年(四四六)生。

普通六年 乙巳 五二五 七十歲

裴邃卒。不詳生年

普通七年 丙午 五二六 七十一歲

陸倕卒。年五十七、宋泰始六年(四七〇)生。
周舍卒。年五十六、宋泰始五年(四七二)生。

蕭宏卒。年五十四、宋元徽元年(四七三)生。

梁武帝大通元年 丁未 五二七 七十二歲

三月、武帝、同泰寺に幸し、捨身する。
善勝、威勝二刀を武帝に獻ずる。
紀下

鏡と刀劍とは、深山幽谷を跋渉する道士にとって、

魔除けの靈器として不可欠なものであった。従つ

て、それらの製作に必要な冶金技術は、道術の一種

として道士の間に保持されており、弘景も深い知識

と技術を有していた。彼の著作として傳えられる

『古今刀劍錄』は後人の手が加っているが、普通元

年、武帝より十三口の刀劍の鑄造を命ぜられたとい

う記事がある。善勝、威勝の二刀がその時の命に應

じたものかどうかは不明だが、いずれ武帝の命によ

って作られたものである。『藝文類聚』卷六十に

引く「梁簡文帝謝勅賚善勝威勝刀啓」は、後に蕭綱

がこの二刀を譲られた時のものであるが、それに

は、「冰鏘含采、雕琰表飾、名均素質、神號脫光、

五寶初成、曹丕先荷其一、二勝今造、愚臣總被其

恩、錫韓非之書、未足爲比、給博山之筆、方比更

輕」という。相當な名刀であった。このため、蕭綱はその著『金樓子』の中で、自分の墓所の副葬品にするように指定している。

ところで、弘景の道術は冶鑄に止らず多方面にわたるものであった。それらの道術は神祕的要素を多分に含んでいるにしろ、その根柢には豊富な科學技術的知識が存在した。このことが、弘景に科學者としての一面をも附與している。就中、『南史』本傳に、彼がその曆學知識を驅使して、後漢熹平曆による熹平三年の冬至の時刻が、實際の天象より二日と十二刻遅れていることを計算したという記事は、彼が純粹な天文學的興味に基づく觀測と、高度な數學を驅使した曆計算を行っていたことを想像させる。また、彼が渾天象を作ったことも本傳に見えるが、『本起錄』が伝えるものは、二十八宿の度數や七曜の行道、昏明の中星などが配され、しかも機械仕掛けで自動的に天象に合致するものであった。これは、『隋書』卷十九天文志上に見える、宋元嘉十三

陶弘景年譜考略(下)

年に作成されたという渾天象とはほぼ同一の機構をもつものであり、極めて精巧な、高度の仕掛をもつものであった。また、これと平行して水力を利用した自動時計の製作をしたことも『本起錄』に見える。

かかる科學技術的知識とそれに基く實驗觀測製作は、極めて限定的であるにしろ、弘景に科學的合理的思考を附與する基盤を形成したのであり、彼が金石藥を中心とする従来の本草學を、草木藥を中心とするより「合理的」な體系へと轉換させ、更に、それを彼の登仙理論の中心に据えることで、その道教體系をも「合理化」する基盤となっている。

曇鸞、弘景の許に來、本草、仙術を學んで歸る。

曇鸞は雁門今山西省代縣の人。中國淨土宗の始祖として有名である。

『續高僧傳』によれば、彼は大通年間、弘景の道術を學ぶために遙々渡江してきたわけで、弘景の本草家・道術家としての名聲が河北にまで高かったことが知られる。また、弘景が曇鸞から何らかの思想的影響を受けたことも考えられよう。

張率卒。年五十三、宋元徽三
年(四七五)生。到洽卒。年五十一、宋昇明
元年(四七七)生。

鄭道元卒。生年不詳

顔介(之推)生。不詳
沒年。何胤卒。年八十六、宋元嘉二十
三年(四四六)生。昭明太子蕭統卒。年三十
一、齊

大通二年 戊申 五二八 七十三歲

中興元年(五〇一)生。

梁武帝中大通元年 己酉 五二九 七十四歲

中大通四年 壬子 五三一 七十七歲

九月、武帝、同泰寺に四部無遮大會を設けて捨身し、

庾詵卒。年七十八、宋孝建二
年(四五五)生。孔休源卒。年六十四、宋泰
始五年(四六

群臣、一億萬錢をもつて奉贖する。武帝
紀下

徐遵明卒。年五十五、魏延興五
年(四七五)生。

中大通五年 癸丑 五三三 七十八歲

二月、武帝、同泰寺に幸して講經し、七日にして歸

中大通二年 庚戌 五三〇 七十五歲

裴子野卒。年六十二、宋泰始五
年(四六九)生。

紀下

中大通三年 辛亥 五三一 七十六歲

十月、武帝、同泰寺に幸して講經し、七日にして歸

梁武帝大同元年 乙卯 五三五 八十歲

紀下

慧約卒。年八十四、宋元嘉二十
九年(四五二)生。

十一月、武帝、再び同泰寺に幸して講經し、七日にし

「草堂法師傳」?

て歸る。武帝
紀下

草堂寺慧約、俗名は婁德素、東陽烏傷
今浙江省
義烏縣の

人。初め剡の梵居寺にいたが、のち周顒が鐘山の雷次宗の舊館に草堂寺を建てた時に寺主となった。弘景が、恐らくは沈約を介して慧約と交渉を持ったことは既に述べた。弘景と佛教との關りを考える上では重要な人物の一人である。弘景には外に、「和約法師臨友人」文なる五言詩が存する。

徐勉卒。年七十、宋泰始二年(四六六)生。

大同二年 丙辰 五三六 八十一歳

「題所居壁」文集、梁書侯景傳？

『梁書』卷五十六侯景傳にいう、「先是、丹陽陶弘

景隱於華陽山、博學多識、嘗爲詩曰、夷甫任散誕、

平叔坐談空、不習武事、至是、景果居昭陽殿、

士競談玄理、不習武事、至是、景果居昭陽殿。』南

史」本傳にいう、「弘景妙解術數、逆知梁祚覆沒、

預制詩云……詩祕在篋裏、化後門人方稍出之。

『資治通鑑』梁紀十三は、この頃の作とする。

三月十二日、朱陽館に死す。中散大夫を贈られ、貞白

陶弘景年譜考略(下)

先生と謚される。同十四日、句容雷平山に葬られる。

『南史』本傳に載せる遺令にいう、「既沒、不須沐浴、不須施牀、止兩重席於地、因所著舊衣、上加生被裙及臂衣鞅、冠巾法服、左肘錄鈴、右肘藥鈴、佩符絡左腋下、繞腰穿環、結於前、釵符於髻上、通以大袈裟覆衾蒙首足、明器有車馬、道人道士並在門中、道人左、道士右、百日內、夜常燃燈、且常香火」。道佛二教を兼修した弘景にふさわしい遺令である。

陶弘景著作著録表

尙書序注

本起録「注尙書毛詩序共一卷」

毛詩序注

本起録「注尙書毛詩序共一卷」

隋志・經部・詩「集注毛詩二十四卷：梁桂州刺史崔靈

恩注、梁有毛詩序一卷、梁隱居先生陶弘景注、亡」

三禮目錄注

本起錄「三禮序共一卷：并自注」

草堂法師傳

隋志·經部·禮「三禮目錄一卷：鄭玄撰、梁有陶弘景

隋志·史部·雜傳「梁故草堂法師傳一卷」

注一卷、亡」

舊唐志·史錄·雜傳「草堂法師傳一卷：陶弘景撰」

孝經集注

古今州郡記

本起錄「孝經論語集注并自立意共一秩十二卷」

本起錄「古今州郡記三卷：并造西域圖一張」

隋志·經部·孝經「集議孝經一卷：晉東陽太守袁敬仲

南史本傳「古今州郡記」

集……陶弘景集注孝經一卷……亡」

論語集注

三國志讚述一卷 本起錄

本起錄「孝經論語集注并自立意共一秩十二卷」

隋志·經部·論語「論語七卷：盧氏注……陶弘景

真人水鏡

集注論語各十卷……亡」

隋志·子部·兵「真人水鏡十卷」

舊唐志·子錄·兵法「真人水鏡十卷：陶弘景撰」

日本國見在書目錄·兵家「真人水鏡十」

帝王年曆

崇文總目·子部·兵書類「真人水鏡十二卷：陶弘景

本起錄「帝王年曆五卷：起三皇至汲冢竹書爲正、檢五

撰」

十家書曆異同、共撰之也」

南史本傳「帝代年曆」

新唐志·子錄·兵書類「陶弘景真人水鏡十卷」

舊唐志·史錄·雜史「帝王年曆五卷：陶弘景撰」

通志·六藝略·諸子類「真人水鏡十卷：陶弘景撰」

新唐志·史錄·雜史類「陶弘景帝王年曆五卷」

宋志·子部·兵書類「陶弘景真人水鏡十三卷」

握鏡

舊唐志·子錄·兵法「握鏡一卷：陶弘景撰」

日本國見在書目錄·五行家「握鏡二：陶隱居撰」

新唐志·子錄·兵書類「握鏡三卷」

太公孫吳書略注二卷 本起錄

本草經集注

本起錄「本草經注七卷」

南史本傳「本草集注」

隋志·子部·醫方「神農本草八卷：梁有……陶

隱居本草十卷……陶弘景本草經集注七卷……

亡」

舊唐志·子錄·醫方「本草集經七卷：陶弘景撰」

日本國見在書目錄·醫方家「神農本草七：陶隱居撰」

新唐志·子錄·醫術類「陶弘景集注神農本草七卷」

通志·藝文略·醫方類「神農本草八卷：陶隱居集注」

注本草表序

日本國見在書目錄·醫方家「注本草表序一：陶隱居

陶弘景年譜考略(下)

撰

本草夾注音

日本國見在書目錄·醫方家「本草夾注音一：陶隱居

撰」

效驗方

本草經集注序錄「效驗方五卷」

補闕肘後百一方序「效驗方五卷」

本起錄「效驗施用藥方五卷」

南史本傳「效驗方」

隋志·子部·醫方「陶氏效驗方六卷：梁五卷」

舊唐志·子錄·醫方「效驗方十卷：陶弘景撰」

新唐志·子錄·醫術類「陶弘景效驗方十卷」

通志·藝文略·醫方類「陶隱居效驗方十卷」

補闕肘後百一方

本草經集注序錄「又補葛氏肘後方三卷」

本起錄「肘後百一方三卷：增補葛氏」

南史本傳「肘後百一方」

隋志·子部·醫方「肘後方六卷：葛洪撰、梁二卷、陶

陶弘景年譜考略(下)

七〇

弘景補闕肘後百一方九卷、亡」

舊唐志·子錄·醫方「補肘後救卒備急方六卷；陶弘景撰」

日本國見在書目錄·醫方家「葛氏肘後方三；陶弘景撰」又「肘後百方九卷」

新唐志·子錄·醫術類「補肘後救卒備急方六卷」

通志·藝文略·醫方類「補肘後救卒備急方六卷；陶隱居撰」

直齋書錄解題·子部·醫書類「肘後百一方三卷；晉葛洪撰、梁陶弘景增補、本名肘後救卒方、率多易得之藥、凡八十六首、陶併七首、加二十二首、共爲一百一首」

文獻通考·經籍考·子部·醫家「肘後百一方三卷；以下引直齋書錄解題」

四庫全書總目提要·子部·醫家類「肘後備急方八卷；

浙江范懋柱家天一閣藏本；晉葛洪撰……是書初名

肘後卒急方、梁陶弘景補其闕漏、得一百一首、爲肘後百一方、金楊用道又取唐慎微證類本草諸方、附於肘後

隨證之下、爲附廣肘後方……此本爲明嘉靖中襄陽知府呂容所刊、始並列葛陶楊三序於卷首、書中凡楊氏所增、皆別題附方二字、列之於後、而葛陶二家之方、則不加分析、無可辨別、案隋書經籍志、葛洪肘後方六

卷、梁二卷、陶弘景補闕肘後百一方九卷亡、宋史藝

文志止有葛書而無陶書、是陶書在隋已亡、不應元時復出、又陶書原目九卷、而此本合楊道用所附、祇有八

卷、篇秩多寡、亦不相合、疑此書本無百一方在內、特後人取弘景原序冠之耳、書分五十一類、有方無論、不

用難得之藥、簡要易明、雖頗經後來增損、而大旨精切、猶未盡失其本意焉」

廉石居藏書記「肘後備急方八卷；右肘後備急方八卷、

明萬曆間岳州守劉自化刊本、葛洪書本三卷、名救急方、八十六首、梁陶弘景增之、凡一百一首、以朱書甄

別、又名肘後百一方、仍爲三卷、金皇統時、國子監博士楊用道又增爲八卷、以唐慎微證類本草類附於後、名

附廣肘後方、前有元至元時段成己序並明巡按李拭序、段氏所序似據陶弘景補本、尙在楊用道未增之前、此書

見於讀書志及文獻通考、皆名百一方、仍三卷、而葛氏原書不可得見、甚可惜也」

名醫別錄

隋志·子部·醫方「名醫別錄三卷：陶氏撰」

舊唐志·子錄·醫方「名醫別錄三卷」

新唐志·子錄·醫術類「名醫別錄三卷」

通志·藝文略·醫方類「名醫別錄三卷：陶隱居集」

靈奇與祕術

本起錄「靈方祕奧一卷」

日本國見在書目錄·醫方家「靈奇與祕術一：陶隱居撰」

撰

宋志·子部·醫書類「陶隱居靈奇祕奧一卷」

內傳「靈奇祕奧一卷」

太清草木集要

隋志·子部·醫方「太清草木集要二卷：陶隱居撰」

舊唐志·子錄·醫方「太清諸草木方集要三卷」

日本國見在書目錄·醫方家「太清諸草木方集要二」

新唐志·子錄·醫術類「太清諸草木方集要三卷」

陶弘景年譜考略(下)

通志·藝文略·醫方類「太清草木方集要三卷：陶隱居撰」

太清諸丹集要

隋志·子部·醫方「太清諸丹集要四卷：陶隱居撰」

舊唐志·子錄·醫方「太清玉石丹藥要集三卷：陶弘景撰」

撰

新唐志·子錄·醫術類「太清玉石丹藥要集三卷」

合丹節度

本起錄「合丹藥諸法式節度一卷」

隋志·子部·醫方「合丹節度四卷：陶隱居撰」

服餌方

隋志·子部·醫方「服餌方三卷：陶隱居撰」

練化雜術

隋志·子部·醫方「練化雜術一卷：陶隱居撰」

集金丹藥白要方一卷

服雲母諸石藥消化三十六水法一卷

服草木雜藥方一卷

天儀說要

隋志·子部·天文「天儀說要一卷：陶弘景撰」

通志·藝文略·星數類「天儀說要一卷：陶弘景撰」

抱朴子注二十卷 本起錄
真誥

七曜新舊術二卷 本起錄

占筮略要一卷 本起錄

風雨水旱飢疫占要一卷 本起錄

算數藝術雜事一卷 本起錄

舉百事吉凶曆一卷 本起錄

五行經序

日本國見在書目錄·五行家「五行經序一：陶隱居撰」

老子注

本起錄「老子內外集注四卷」

舊唐志·子錄·道家「老子四卷：陶弘景注」

新唐志·子錄·道家類「陶弘景注老子四卷」

通志·藝文略·諸子類「老子道德經四卷：陶弘景撰」

子略「老子注：陶弘景」

本起錄「真誥一秩七卷：此一誥並是晉興寧中來真降授楊許手書遺跡、顧居士已撰、多有漏謬、更詮次敘注之爾、不出外聞」

舊唐志·子錄·道家「真誥十卷：陶弘景撰」

崇文總目·子部·道書類「真誥十卷：陶弘景撰」

新唐志·子錄·道家類「陶弘景真誥十卷」

郡齋讀書志·子部·神仙「真誥十卷：右梁陶弘景撰、

皆眞人口授之誥、故以爲名、記許邁許謚楊羲諸仙受道

之說、本七卷、連題一象甄二命授三協昌期四稽神樞五

握眞輔六翼眞檢七、後人析第一第二第四各爲上下」

通志·藝文略·諸子類「真誥十卷：梁陶弘景撰」

遂初堂書目·子部·道家類「真誥」

直齋書錄解題·子部·神仙類「真誥十卷：梁華陽隱居

陶弘景撰、述楊羲許邁許玉斧遇仙眞傳受經文等事」

文獻通考·經籍·子部·神仙家「真誥十卷：以下引郡

齋讀書志、朱子語類曰、道書中真誥末後有道授篇、却

是竊佛家四十二章經爲之、非特此也、至如地獄託生妄誕之說、皆是竊他佛教中至鄙至陋者爲之、某嘗謂其徒曰、自家有箇寶珠、被他竊去了、却不照管、亦都不知、却去它墻根壁角、竊得箇破瓶破罐、用此甚好笑」

宋志·子部·道家類「陶弘景真誥十卷」

文淵閣書目「真誥：一部二冊」又「真誥：一部一冊」

晁氏寶文堂書目「真誥五冊」又「真誥：不全、缺一套」

趙定宇書目「真誥：十本」

紅雨樓書目「真誥」

世善堂藏書目錄「真誥十卷：陶弘景」

道藏目錄詳注「真誥：二十錄、華陽洞天真白先生陶隱

居集」

虞山錢遵王藏書目錄彙編「陶弘景真誥十卷」

四庫全書總目提要·子部·道家類「真誥二十卷：兩淮

馬裕家藏本：梁陶弘景撰、弘景有刀劍錄、已著錄、是

書凡運象篇甄命授協昌期稽神樞闡幽微握真輔翼真檢等

七篇、其運象篇末弘景敍錄、又作運題象、前後必有一

陶弘景年譜考略(下)

譌、然未詳孰是也、文獻通考作十卷、此本乃二十卷、

蓋後人所分析也、所言皆仙真授受真訣之事、朱子語錄

云、真誥甄命篇、欲是竊佛家四十二章經爲之、至如地

獄託生妄誕之說、皆是竊佛教中至鄙至陋者爲之、黃伯

思東觀餘論則云真誥衆靈教戒條後方圓諸條、皆與佛四

十二章經同、後人所附、然二氏之書亦存此一家於天地

間耳、固不必一一別是非、亦無庸一一辯真僞也、伯思

又云、小宋太乙宮詩、瑞木千尋聳、佛圖幾弔開、註云

真誥謂一卷爲一弔、殊不知真誥所云弔卽卷字、蓋從省

文、真誥音亦爾、非弔字也、然則此書諸卷、皆原作

弔字、陶宗儀說郛、蓋本於此、今皆作卷幾、亦非弘景

之舊矣」

四庫簡明目錄·子部·道家類「真誥二十卷：梁陶弘景

撰、凡七篇、所記皆神仙授受真訣之事、凡降現月日、

文字語言、一一詳載、其事不足辯誥、而敍述雅飭、詩

歌書牘、亦斐然可觀、乃不類道家之野談、蓋弘景本博

學工文也」

孫氏祠堂書目內編「真誥八卷：陶弘景撰、一明俞安期

前刊本、一改刊本、一張氏照曠閣刊本」

絳雲樓書目「真誥：十卷、陶隱居」

邵亭知見傳本書目「真誥二十卷：梁陶弘景撰、明俞安

期校前後二本、學津討源本、道藏輯要本」

百宋樓藏書志「真誥二十卷：陶弘景撰」

廉石居藏書記「真誥二十卷：右真誥二十卷、梁陶隱居

弘景撰、明俞安期校刊、在前有宋嘉定間高似孫敘、稱

易如剛告予茅山刊真誥、欲敘其略、是此書宋時茅山道

士刊行者、按其書記神仙降形、書寫歌詩之屬、似近世

所謂扶箕降仙書者、道術小數能致鬼物、亦或有之、所

云仙人名目、皆寄託也、人陽也而接於陰、非致福之

道、明鄭鄭以家數世降仙扶箕、父母信奉之、其父以仙

人責過其母溫體仁附致其罪、不得遂以此事罪、鄭以逼

父杖母、罹於極刑、天下冤之、扶箕之弊如此、可不畏

歟」

鐵琴銅劍樓藏書目錄「真誥二十卷：明刊本、梁陶弘景

撰、此明俞安期依道藏本雕刻、前有高似孫屠隆序、每

卷末附音釋辯訛、考訂文字、極為詳慎、是書舊止十卷、

文獻通考與書錄解題郡齋讀書志皆合、此本二十卷、蓋
入藏時分析、說詳安期凡例」

文瀾閣所存書目「真誥二十卷：六册、補鈔」

陰山樓書目「真誥兩本」

江蘇省立國學圖書館圖書總目「真誥十卷：梁秣陵陶弘

景、嘉靖刊本」

北京圖書館善本書目「真誥二十卷：梁陶弘景撰、明萬

曆二十八年刻本、十册」又「真誥二十卷：梁陶弘景

撰、明萬曆三十二年俞安期重修本、十二册」又「真誥

二十卷：梁陶弘景撰、清順治十八年、錢謙益家抄本、

四册」

登真隱訣

本起錄「登真隱訣三秩二十四卷：此一訣皆是修行上真

道經要妙祕事、不以出世」

舊唐志·子錄·道家「登真隱訣二十五卷：陶弘景撰」

崇文總目·子部·道書類「登真隱訣六十卷：陶弘景

撰」

新唐志·子錄·道家類「陶弘景登真隱訣一十五卷」

郡齋讀書志·子部·神仙「登真隱訣二十五卷：右梁陶

夢記

弘景撰、以爲學其訣者當由階而登、眞文多隱、非訣莫登、故以名書、凡七篇十七條隋志云」

本起錄「夢記一卷：此一記先生自說所夢微想事、不以示人」

通志·藝文略·諸子類「登真隱訣六十卷：陶弘景撰」

遂初堂書目·子部·道家類「登真隱訣」

學苑

文獻通考·經籍·子部·神仙家「登真隱訣二十五卷」

本起錄「學苑十秩百卷：此一書、先生常云、群書舛

以下引郡齋讀書志」

雜、欲探一事、不可徧檢、乃鈔古今要用、以類相從爲

宋志·子部·道家類「陶弘景登真隱訣三十五卷」

一百五十條、名爲學苑、比於皇覽十倍、該備、近賜翊

世善堂藏書目錄「發真隱訣二十卷：陶弘景」

語、吾無復此暇、汝可踵成之、此書若畢、於學問手筆

道藏目錄詳註「登真隱訣：三卷、華陽隱君陶弘景撰」

家無復他尋之勞矣」

絳雲樓書目「登真隱訣：二十五卷、陶弘景」

南史本傳「學苑百卷」

斷穀祕方一卷 本起錄

消除三尸諸要法一卷 本起錄

世語闕字

撰集服炁導引法一卷 本起錄

本起錄「世語闕字二卷：依陸文、更以意造世語所闕

集人間諸却災患法一卷 本起錄

者」

續臨川康王世說二卷 本起錄

員儀集三卷 本起錄

玉匱記三卷 本起錄

陶弘景集

陶弘景年譜考略(下)

隋志「梁隱居先生陶弘景集三十卷」又「陶弘景內集十五卷」

舊唐志「陶弘景集三十卷」

新唐志「陶弘景集三十卷」

通志·藝文略「隱居先生陶弘景集三十卷」又「陶弘景內集十五卷」

遂初堂書目「陶弘景集」

道藏目錄詳註·太玄部「華陽陶隱居集：二卷 貞白先生集 仙詩」

虞山錢遵王藏書目錄彙編「陶隱居集二卷」

平津館鑒藏書籍記「華陽陶隱居集二卷、題昭臺弟子傳霄編、大洞弟子陳桷校勘、此從道藏本影寫、上卷有尊

一、下卷有尊二字號、陶弘景集、隋唐志俱作卅卷、此本不知何時編集、唐宋藝文志晁氏讀書志陳氏書錄解題

讀書敏求記四庫全書俱不載、每葉十行、行十七字」

孫氏祠堂書目「陶貞白集二卷：一明黃淮序刊本、一道藏本、傳霄編」

絳雲樓書目「陶貞白集一冊：三十卷」

邵亭知見傳本書目「華陽隱居集二卷：梁陶弘景撰、弘景有真誥、已著錄、隋唐志皆有陶弘景集三十卷、隋又有內集十五卷、此僅二卷、尚不及舊編之十一、從明道藏本錄出、阮氏以進呈、明時有黃省曾編刻本、汪士賢刻與自集二卷、即黃省曾編本」

詔宋樓藏書志「貞白先生陶隱居集一卷：張立人手抄本：梁陶弘景撰、昭臺弟子傳霄編集：先生文集三十卷、

內集十五卷、今皆亡失不傳、故禮部侍郎王公欽臣哀其遺文三十二篇以爲一卷、南豐曾恂復得寒夜愁胡笳二詩

於古樂府集中、難沈鎮軍均聖論於弘明集中、因考其製作先後爲之次、以類相從、并殘文附於後、嘉靖甲辰假

得崑山周□□氏所藏紹興刻本、因手錄一帙、藏於蕭間齋、是歲九月朔、燈下文嘉休承識：癸丑秋八月、史臣

紀得觀并手錄一裘：庚申春日、周天球借校玄泊齋：張青甫自吳門來、携休承所鈔本、餘既以校坊本矣、因思

有抄本未必是而坊本未必非者、手定此帙、蓋崇禎改元之初夏、虞山徐濟忠：夏末復借抄本對校、凡字可兩

通、皆志其上方必較、然差謬始不復志、然亦百之一二

耳、濟忠又書：崇禎戊辰夏四月、餘適鹿城良夫師時、館張氏、餘往謁、因見師校錄是集、明年己巳、餘得借校、然坊刻脫誤頗甚、不堪改抹、故另寫此本、其字蹟前後非一、則餘及李涵仲奚靜宜共書也、五月十七日午、震澤葉奕記於孫氏蕉夢軒之雨窓：張氏手跋曰、林宗寫本、今藏聽雲陸氏、餘從陸氏借錄、乾隆元年嘉平朔日錄竟、青芝：寧經室外集曰、華陽陶隱居集二卷、梁陶弘景撰、弘景有真誥、四庫全書已著錄、此其生平雜文及與武帝往復論書之劄、然攷隋書經籍志、梁隱居先生陶弘景集三十卷、又內集十五卷、至宋人作唐書藝文志、僅載陶弘景集三十卷、則疑其所作內集已佚、自是以後、傳述愈微、晁公武陳振孫皆未著錄、是本從明道藏本錄出、卷首載昭臺弟子傳霄編集、大洞弟子陳樵校勘、蓋亦道家者流、惟集前有江總序一首、似尙存其舊、餘則存什之二二而已」

儀顧堂續跋「貞白先生陶隱居集、題昭臺弟子傳霄編集、大洞弟子陳樵校勘、鏤板前有隱居傳、後有梁元帝昭明太子邵陵王綸陶隱居碑司馬子微碑陰記蘇庠像贊、

又集外兩文、隱居集久亡、王欽臣始哀遺文三十二篇、南豐曾恂益以寒夜愁胡笳二詩難均聖謨、傳霄爲之編次、附殘文于後、紹興中有刊本、嘉靖甲辰、文休承錄于崑山周氏、崇禎戊辰、葉林宗奕從文本傳錄、此則乾隆元年張青芝位借葉本所手錄者：四庫未收阮元文達始進呈、此本比阮本較爲完善」

善本書室藏書志「梁陶貞白先生文集一卷：精寫本、何夢華藏書：五嶽山人黃省曾編校：此本前有侍中尙書令江總序並題云、先生文集三十卷、內集十五卷、今皆亡失不傳、故禮部侍郎王公欽臣哀其遺文三十二篇以爲一卷、南豐曾恂復得寒夜愁胡笳二詩於古樂府中、難沈鎮軍均聖論於弘明集中、因攷其製作先後爲之次、以類相從、并殘文附於後、請雨詞一篇獨列於卷前、有石甌山樵秋陽山人青華館布衣暖菜根香讀書滋味長錢江何氏夢華館藏諸印」又「陶貞白集二卷：明刊本：梁秣陵陶弘景著：按集中壽山誌未注云、陳武帝貞明二年、勅令尙書令江總始撰先生文集、先生去世已五十三載、文章頗多散落、而隋經籍志、梁隱居先生陶弘景集三十卷、

又內集十五卷、至宋作唐藝文志、僅載集三十卷、不著內集、晁公武陳振孫兩家且不著錄、此編明黃省曾從道藏錄出、江夏黃注重加校正、釐爲二卷、增梁元帝碑文沈約與弘景書二篇、付贛郡蕭氏刻梓并加序云、有邵錫章印豫鐘荆華書屋三印」

適園藏書志「華陽隱居集二卷：舊鈔本：梁陶弘景撰、

弘景字通明、句容人、事蹟見梁書列傳、此其生不雜文及與武帝往復論書之劄、據其集中尋山誌云先生去世後久、無人編錄文集、至陳武帝貞明二年、勅侍中尙書令江總始撰文集、先生以大同二年解駕、至是五十二載矣、文章頗多散落云云、然攷隋書經籍志、梁隱居先生陶弘景集三十卷、又內集十五卷、至宋人作唐書藝文志、僅載陶弘景集三十卷、內集已佚、自是以後、傳述愈微、晁公武陳振孫皆未著錄、是本從明道藏本錄出、卷首載昭臺弟子傳霄編集、大洞弟子陳桷校勘、蓋亦道家者流、惟集前有江總序一首、尙存其舊、餘則從各類書輯出、大半不全、通明才氣橫逸、膏腴馥實、足沾溉後人、蓋弘景在道家亦號學者、其著書與抱朴抗衡、所

謂列仙之儒也、道藏本文一卷、附錄一卷、此守山閣鈔本、卽刻入指海者、以通明文分作二卷而去附錄、以茅山志法書要錄及類書校、尙少臆改」

文祿堂訪書記「貞白先生陶隱居文集一卷：梁陶弘景撰、明馮已蒼鈔本、半葉九行、行十八字、左欄外刊馮氏家藏四字、附錄末周氏手書庚申春日周天球借校于玄泊齋：文氏跋曰、嘉靖甲辰、假得崑山周氏所藏紹興刻本、手錄一帙、藏于蕭閭齋、是歲九月朔、燈下文嘉休承識：馮氏手跋曰、崇禎乙卯、清明後一日、湖賈邵姓者持來黃五獄所刻本、頗有勝此處、恨目疾不能細校、計多喜雨詞一篇及邵陵王蕭綸所撰碑銘昭明太子文司馬子微碑陰梁元帝碑文沈休文書、俟另日增入、是編原本爲鹿城張氏所藏、休承真蹟、是役同違者、有宋刊長吉歌詩編徐度却掃二書、海虞馮彥淵燈下識於荔園：有宋本印馮氏藏本謙牧堂藏書記楊紹和宋本存書室印」

江南圖書館善本書目「陶貞白文集一卷：梁秣陵陶弘景、精寫本、何夢華藏書」又「陶貞白集二卷：梁秣陵陶弘景、明刊本」

北京圖書館善本書目「貞白先生陶隱居文集一卷：梁陶

集藥訣

弘景撰：明嘉靖史臣紀抄本、史臣紀、傅增湘跋、徐

通志·藝文略·醫方類「陶隱居集藥訣一卷」

邨、陸潤庠、勞健等題款、一冊」又「貞白先生陶隱

藥總訣

居文集一卷：梁陶弘景撰、清劉氏味經書屋抄本、劉喜

重修政和經史證類本草·補注所引書傳「藥總訣：梁陶

海校並跋、與支遁集合一冊」又「華陽陶隱居集二卷

隱居撰、論夫藥品五味寒熱之性、主療疾病及採畜時月

：梁陶弘景撰、明末毛氏汲古閣刻本、一冊」

之法、凡二卷、一本題云藥像口訣、不著撰人名氏、文

國立中央圖書館善本書目「梁貞白先生陶隱居集二卷附

字並相類」

錄一卷一冊：梁陶弘景撰、明黃注等編、明嘉靖壬子

藥性論

(三十一年)贛郡蕭氏古翰樓刊本」

重修政和經史證類本草·補注所引書傳「不著撰人名

北京大學圖書館藏李氏書目「貞白先生陶隱居集一卷：

氏、集衆藥品類、分其性味君臣主病之効、凡四卷、一

梁陶弘景撰、明葉奕抄本(彭元瑞及李木齋跋)」

本題曰陶隱居撰、然所記藥性功效與本草有相戾者、疑

存疑書目

天文星經

握鏡圖

宋志·子部·兵書類「陶弘景握鏡圖一卷」

玉海卷二天文「案崇文總目、天文星經五卷、梁陶弘景

握鑑方

宋志·子部·兵書類「陶弘景握鑑方三卷」

校合三垣列宿中外官三百十九名、各設圖象、著巫咸甘

陶弘景年譜考略(下)

宋志·子部·天文類「陶隱居天文星經五卷」

像曆

玉海卷二天文「中興書目、像曆一卷、梁陶弘景校定推

演巫咸氏甘氏石氏等說」

宋志·子部·天文類「陶弘景象曆一卷」

陶隱居林

崇文總目·子部·卜筮類「陶隱居林一卷」

通志·藝文略·諸子類「周易林一卷；陶弘景撰」

易隨

崇文總目·子部·卜筮類「易隨三卷；陶弘景撰」

通志·藝文略·諸子類「易隨三卷；陶隱居撰」

宋志·子部·五行類「陶隱居易隨三卷」

易林體

通志·藝文略·諸子類「易林體三卷；陶弘景撰」

三命鈔略

通志·藝文略·諸子類「三命鈔略二卷；陶隱居撰」

三命立成算經

通志·藝文略·諸子類「三命立成算經一卷；陶隱居撰」

三命殺曆

通志·藝文略·諸子類「三命殺曆一卷；陶隱居撰」

五行運氣

宋志·子部·五行類「陶弘景五行運氣一卷」

證應集

宋志·子部·五行類「陶弘景證應集三卷」

洞玄靈寶真靈位業圖

道藏目錄詳註「洞玄靈寶真靈位業圖：一卷；梁貞白先

生陶弘景纂」

絳雲樓書目「真靈位業圖：一卷、陶弘景、其書依約真

誥爲之、必是後人附會耳、王司寇之言甚當」

上清握中訣

通志·藝文略·諸子類「上清握中訣三卷；陶弘景撰」

宋志·子部·道家類「陶弘景上清握中訣三卷」

養生延命集

通志·藝文略·諸子類「養生延命集二卷：陶弘景撰」

宋志·子部·道家類「陶弘景養生延命錄二卷」

道藏目錄詳註「養生延命錄：二卷：華陽陶隱居注、教

誠篇第一食誠篇第二雜誠忘禳害祈善篇第三」

神仙玉芝瑞草圖

宋志·子部·道家類「陶弘景神仙玉芝瑞草圖二卷」

導引養生圖

郡齋讀書志·子部·神仙「導引養生圖一卷：右梁陶弘

景撰、分三十六種、如鴻鶴徘徊、鴛鴦戩羽之類、各繪

像於其上、田偉家本少八勢」

通志·藝文略·諸子類「導引圖一卷：陶弘景撰」

文獻通考·子部·神仙家「導引養生圖一卷：以下引郡

齋讀書志」

宋志·子部·道家類「陶弘景導引養生圖一卷」

陶真人金丹訣

通志·藝文略·諸子類「陶真人金丹訣三卷：陶弘景

撰」

煉服雲母法

陶弘景年譜考略(下)

通志·藝文略·諸子類「煉服雲母法一卷：陶弘景撰」

經食草木法

通志·藝文略·諸子類「經食草木法一卷：陶隱居撰」

達靈經

通志·藝文略·諸子類「達靈經一卷：陶弘景撰」

鬼谷子注

郡齋讀書志·子部·縱橫家類「鬼谷子三卷：右鬼谷先

生撰……本經持樞中經三篇、梁陶弘景注、隋志以

爲蘇秦書、唐志以爲尹知章注、未知孰是云云」

述古堂藏書總目「鬼谷子陶弘景注六卷：抄」

虞山錢遵王藏書目錄彙編「陶弘景注鬼谷子三卷：述鬼

谷子陶弘景注六卷鈔 敏子」

讀書敏求記「陶弘景注鬼谷子三卷：鬼谷子無鄉里、俗

姓名字、戰國時隱居潁川陽城之鬼谷、故以爲號、其轉

丸祛篋二篇今亡、貞白曰、或云卽本經中經也」

崇文總目輯釋「鬼谷子三卷：鬼谷先生撰：侗案書錄解

題云、隋志有皇甫謐樂臺二家、今本稱陶弘景注、攷通

志略作樂臺撰、誤也、今隋志樂臺作一、則臺字亦誤、
諸仁腹曰、唐志又有尹知章注三卷」

孫氏祠堂書目「鬼谷子一卷：一明繇眇閣刊本、一明十
二子刊本、一明刻子彙中本、一明吳勉學刊本、一題陶

弘景注道藏本、秦恩復刊」

四庫未收書目提要「鬼谷子陶弘景注一卷：秦恩復校
刻、兩本、縱橫」

絳雲樓書目「鬼谷子：三卷蘇秦：陶弘景註鬼谷子」

邵亭知見傳本書目「鬼谷子一卷：鬼谷子撰、子彙本、

十二子本、繇眇閣本、乾隆五十四年江都季氏刊陶弘景

注道藏本、嘉慶十年江都秦氏重刊陶弘景注三卷、佳、

盧抱經以述古舊抄補道藏本、明崇德書院本同道藏」

韻宋樓藏書志「鬼谷子三卷：明抄本：不著撰人名氏：

梁陶弘景注」

善本書室藏書志「鬼谷子三卷：梁陶弘景注：鮑廷博校
抄本」

古今刀劍錄

崇文總目：子部·小說家類「古今刀劍錄一卷：陶弘景
撰」

群齋讀書志·子部·類書類「古今刀劍錄一卷：右梁陶
弘景撰、記古今刀劍」

宋志·子部·小說類「陶弘景古今刀劍錄一卷」

晁氏寶文堂書目「陶隱居刀劍錄」

百川書志「古今刀劍錄一卷：梁華陽道士陶弘景撰、分

四類、夏至三國諸小國吳將魏將以紀錄之」

虞山錢遵王藏書目錄彙編「陶隱居刀劍錄一卷：述器

玩」

四庫全書總目提要子部·譜錄類「古今刀劍錄一卷：兩

江總督採進本：梁陶弘撰……是書所記帝王刀劍、

自夏啓至梁武帝、凡四十事、諸國刀劍、自劉淵至赫連

勃勃、凡十八事、吳將刀周瑜以下凡十事、魏將刀鐘會

以下凡六事、然關張諸葛亮黃忠皆蜀將、不應附入吳將

中、疑傳寫誤佚蜀將刀標題三字、又董卓袁紹不應附

魏、亦不應在鄧艾郭淮之間、均爲顛舛、至弘景生於宋

代、齊高帝作相事、已引爲諸王侍讀、而書中乃稱順帝

準爲楊玉所弑、不應以身歷之事、謬誤至此、且弘景先武帝卒、而帝王刀劍一條、乃預引古今刀劍錄云、自古好刀劍、多投伊水中、以禳滕人之妖、與此本所記漢章帝鑄劍一條、雖文字小有同異、而大略相合、則其來已久、不盡出後人贗造、或亦張華博物志之流、眞僞參半」

四庫簡明日錄・子部・譜錄類「古今刀劍錄一卷：舊本題梁陶弘景撰、記古來刀劍四十事、證以李綽尚書故事、所引亦合、然弘景卒於梁武帝前、而書中稱梁武帝、又斥其緯、殊不可解、殆後人有所竄亂歟」

邵亭知見傳本書目「古今刀劍錄一卷：梁陶弘景撰、百川學海本、說郭本、漢魏本、鞏芳清玩本、龍威秘書本」

韶宋樓藏書志「古今刀劍錄一卷：宋刊本：梁華陽道士陶弘景撰：夫刀劍絀出已久矣、前王後帝莫不鑄之、但以小事記注者不甚詳錄、遂使精奇挺異空成湮沒、慨然有想、遂爲紀云」

善本書室藏書志「古今刀劍錄一卷：梁陶弘景撰：明華

陶弘景年譜考略（下）

氏刊本」

論文の公募

左の要領で、論文・書評の公募を行なっております。會員各位の積極的な御協力をお願い致します。

記

一、論文 四百字詰三十枚程度。英文タイトル・二〜三百

語の英文レジメを添附のこと。

一、書評・新刊紹介 四百字詰十枚程度。

一、送付先 大阪府茨木市安威二三〇

追手門學院大學文學部

東洋文化學科木村研究室内

日本道教學會事務局

一、採否および掲載の時期は、當學會に御一任下さい。

一、抜刷は三十部まで無償です。それを超える部数を御希望

の場合は、實費を戴きます。